

## オリーブ山での説教 (終末的出来事に関する弟子たちへの教え) : 再構成版

## 文脈の確認

1. イエスの公生涯は終わった。
2. イエスは神殿を去り、エルサレムを出て、その東にあるオリーブ山に座る。
3. そこで、弟子たちに「オリーブ山での説教」を語る。
4. その内容は、エルサレムと神殿の崩壊、この世の終わりの前兆、イエスの再臨。
5. 用語の確認
  - (1) この世
    - ① この世=今の時代
      - この世とは、「次の世」を前提にした用語
      - 次の世、来るべき世=メシアの王国の時代
    - ② この世の末に起こるのが、7年間の大患難期
      - メシアの王国が到来するための過渡期
  - (2) この世の終わり、その前兆
    - ① この世の終わり=7年間の大患難期
    - ② この世の終わりの前兆=大患難期の前触れとして起きること
  - (3) イエスの再臨 (さいりん)、その前兆
    - ① 再臨=イエスが地上に帰る=地上再臨は、大患難期の末に起こる
    - ② 再臨の前兆=大患難期に起きること、特に後半期の3年半に起きること
  - (4) 携挙 (けいきょ)
    - ① イエスが空中まで迎えに来て、教会時代の聖徒たちが天に上げられること
    - ② 紀元 30 年の五旬節の祭り (ペンテコステ) に教会が誕生して以降、この携挙の時までに肉体の死を経て天のパラダイスにいた聖徒たち (主イエス・キリストにあって眠っている聖徒たち) は、イエスの復活体とおなじ「栄光の体」を与えられて地上に現れ、天に引き上げられる。
      - 一度死んで栄光の体を与えられることを「復活」という。
    - ③ 携挙の時に地上で生きている聖徒たちは、一瞬のうちに栄光の体に変えられ、天に引き上げられる。
      - 肉体の死を経ないで栄光の体に変えられることを「変換」という。

時の流れ

		この世		移行 準備 期間 75 日	次の世
	この世の終 わりの前兆	この世の終わり			メシアの王国
		大患難期 (7 年間)			
		前半期	後半期		

携挙

再臨

## 説教の骨格

## チャートをご覧ください

1. 神殿崩壊の預言
2. 弟子たちの質問
  - (1) 【Q-1】エルサレムの神殿崩壊はいつ起こるのか。
  - (2) 【Q-2】イエスの再臨の時には、どのような前兆があるのか。
  - (3) 【Q-3】この世の終わりには、どのような前兆があるのか。
3. イエスの回答【A-3】この世の終わりの前兆
  - (1) この世の終わりの前兆とは言えないこと (二つ)
  - (2) この世の終わりの前兆 (三つ+そのほか)
  - (3) 産みの苦しみの初め
4. イエスの回答【A-1】エルサレムの神殿崩壊
  - (1) 【A-3】よりも前に起こること、まず使徒たちへの迫害 (初臨のメシアを拒否したことの延長)
  - (2) 使徒たちへの迫害の次に、エルサレムとその神殿が崩壊する (初臨のメシアを拒否したことに対する神のさばき)
5. イエスの回答【A-2】再臨の前兆
  - (1) 大患難期前半期に起きること (一部は、後半期まで続く)
  - (2) 大患難期後半期に起きること
  - (3) 再臨
  - (4) いちじくの木のとえ
6. 信者と不信者の区別に関する教え
  - (1) 携挙のとき、地上の教会に対して
  - (2) 再臨のとき、大患難期を生き延びた異邦人に対して
    - ① 5つのたとえ話は、主人が帰ってきたときの措置に関すること。よって、再臨であるから、教会の聖徒たちには関係ない。再臨のときに、地上に生き残っている人々が対象である。
    - ② 再臨のときにイスラエル民族は全員救いを受けている。イスラエル民族は全員が信者であるので関係ない。
    - ③ よって、このたとえ話は、再臨の時に地上に生き残っている異邦人について、信者と不信者とに区別する内容である。
    - ④ 実際に異邦人を信者と不信者とに区別するというさばきが、これらのたとえ話に続いて語られる「異邦人の裁き」(ヨシャパテの谷での諸国民のさばき)である。

## オリーブ山での説教

1. 神殿崩壊の預言 (マタイ 24 : 1~2)
  - (1) 神殿拡張工事 紀元前 20 年へロデ大王が着工、前 4 年へロデ大王死去・工事続行
  - (2) ヨハネ 2 : 20 紀元 27 年の春・過越の祭、「神殿着工から 46 年」
  - (3) マタイ 24 : 1 紀元 30 年の春・過越の祭
  - (4) 紀元 64 年、神殿拡張工事の完成
  - (5) 紀元 66 年、ローマに対する第一次戦役勃発
  - (6) 紀元 70 年、エルサレム陥落・神殿炎上崩壊
    - ① ローマ軍の指揮官ティトゥスは、神殿は破壊しないように命令
    - ② しかし、ある兵士がたいまつを神殿に投げ込み、内部が焼失した。
    - ③ 内壁を覆っていた金が溶けて、石と石の間に流れ込む。
    - ④ 金を取り出すために、神殿の石はすべて崩された。
2. 弟子たちの質問 (マタイ 24 : 2~3)
  - (1) 【Q-1】エルサレムの神殿崩壊はいつ起こるのか。
  - (2) 【Q-2】イエスの再臨の時には、どのような前兆があるのか。
  - (3) 【Q-3】この世の終わりには、どのような前兆があるのか。
3. イエスの回答 【A-3】この世の終わりの前兆 (マタイ 24 : 4~8)
  - (1) 終わりの前兆ではないことが二つある (4~6 節)
    - ① 偽キリストの出現 (紀元 131~135 年のシモン・バル・コクバなど)
    - ② 戦争のことや、戦争のうわさ (地域戦争)
  - (2) 終わりの前兆 (7~8 節)
    - ① 「民族は民族に、国は国に敵対して」=世界的規模での戦争
    - ② 飢饉
    - ③ 地震
    - ④ 疫病、恐ろしいこと、天からのすさまじい前兆 (ルカ 21 : 11)
  - (3) 「産みの苦しみの初め」
    - ① 今の世が終わり、新しい世になるための陣痛の初め
    - ② メシアの王国が来る前の苦しみを「陣痛」と呼ぶのはラビ的用語
    - ③ 産みの痛み、陣痛そのものは大患難期。その前兆を陣痛の初めと表現
4. イエスの回答 【A-1】エルサレムの神殿崩壊
  - (1) 【A-3】よりも前に起こること、まず使徒たちへの迫害 (ルカ 21 : 12~19)
    - ① 12 節「これらのすべてのことの前に」=この世の終わりとかいう前に、今から間もなく起こること。使徒たちは、迫害に会う (ユダヤ人共同体からと、異邦人の支配者たちから)
    - ② 13~15 節 迫害は、証しする機会となる。迫害によって散らされて宣教拡大。使徒たちは、事前に証しする内容を準備する必要はない。聖霊によって与えられる。彼らの証しに反論できる者はいない。(「使徒の働き」の記事)
    - ③ 16~17 節 使徒たちの家族関係が破壊される。家族に裏切られる者も出る。

殉教の死を遂げる者も出る（11人の使徒のうち、10人が殉教）。福音のために、隣人から憎まれる。

- ④ 18~19節 復活の栄光の体は、保証されている。迫害者によって奪われることはない。信仰による忍耐を示すことで、霊的に救われていることが証明される（忍耐によって救いを得るのではない）。
- (2) 使徒たちへの迫害の次に、エルサレムとその神殿が崩壊する（ルカ 21：20~24）
- ① エルサレムが軍隊に囲まれたら、滅亡が近い。
- 紀元 66 年、第一次戦役勃発。シリア属州の総督が率いる軍団がエルサレムを包囲し攻撃するも、失敗して撤退。
  - 紀元 67 年、皇帝ネロは、ヴェスパシアヌスに 3 個軍団を率いさせてユダヤに派遣。68 年エルサレム包囲。
  - 6 月に、ガリヤ属州総督の反乱などにより、皇帝ネロが自殺に追い込まれる。ヴェスパシアヌスは、いったん包囲を解いてエジプトにて待機。
  - 69 年 12 月に、ヴェスパシアヌスが皇帝になり、戦役再開。指揮官は息子のティトゥス。
  - 70 年春、エルサレム包囲。第 9 月（現在の 7~8 月）に陥落。
- ② 山へ逃げよ。
- 約 2 万人のユダヤ人信者たちが、エルサレムから逃れた。
  - それ以外の地から約 8 万人のユダヤ人信者たちが合流し、ヨルダン川を東に渡った山地にあるペラという町に避難した。
- ③ この地に大きな苦難が臨み、この民に御怒りが臨む
- 第一次戦役でのユダヤ人の死者は 110 万人
  - イエスをメシアとして信じた信者たちの中からは一人も死者が出なかった。
- ④ 異邦人の時の終わるまで
- 異邦人がエルサレムを支配している期間を指す。
  - ソロモンの神殿がバビロニアによって破壊された時から始まる（前 586 年）。
  - この日から、ダビデの子孫がエルサレムで王位に就くことがなくなる。
  - メシアが王として再臨する時が、異邦人の時の終わりである。
  - 注意：「異邦人の完成のなる時」（ロマ 11：25~26）＝教会に属する異邦人の数が満ちる時。携挙の時を指している。

## 5. イエスの回答【A・2】再臨の前兆

### (1) 大患難期前半に起こる事（マタイ 24：9~14）

#### ① 迫害の勃発（9~10 節）

- 「そのとき」→「それから」、9 節から大患難期の記述に入る。
- 聖徒たちに対する迫害が起こり、多くの者が殉教の死を遂げる。
- 世界の諸国が、聖徒たちを迫害する。

- 多くの者が、迫害を逃れようとして信仰から離れる。
  - 人々が互いに相手を密告し、憎み合う。
- ② 偽預言者たちの出現 (11 節)
- 偽キリストではない。偽預言者=神のことばを代弁すると主張する者。
  - 偽預言者は、神の民イスラエルを欺こうとする。これに対して、教会を欺こうとするのは偽教師 (Ⅱペテロ 2:1)
  - 彼らの預言は、成就しない。
- ③ 罪の増加 (12 節)
- ④ 大患難期を生き延びるユダヤ人たち (13 節)・・・後半期にも関係する
- 大患難期 7 年間を生き延びたユダヤ人たちは、全員が救いを受ける。これは、ひとりのひとりの信仰による救いであるが、ひとりの例外もなく全員が信じて救われるという意味で、民族的救いである。
  - 生き延びたから救われるというわけではない。救いは恵みにより信仰を通して受ける。この原則は、いつの時代も同じ。
  - 信仰の内容は、「福音の三要素」。
  - 彼らを信仰に導くのは、前半 3 年半での世界的な宣教活動。エルサレムにおいて二人の証人、全世界において 14 万 4 千人のユダヤ人宣教師たち (黙 7:4)。
- ⑤ 世界宣教 (14 節)
- 大患難期前半の 3 年半の間に、世界宣教が行われる。
  - 世界宣教で救われる人たちが多く出るから、迫害も起こる。
- (2) 大患難期後半に起こる事 (マタイ 24:15~28)
- ① 「荒らす憎むべき者」の出現 (15 節)
- 荒らす憎むべき者の出現が、大患難期の後半に入るしるし
  - この意味を知るためには、ダニエル書の預言から学ぶ必要がある。
  - ダニエル 9:27
    - 反キリストは、イスラエルと 7 年間の契約 (条約) を結ぶ。
    - 3 年半が経った時点で、彼は条約を破棄する。
    - 神殿での祭儀を止めさせる。
    - 反キリストは、神殿の至聖所に座り、自らを神だと宣言する。
    - 反キリストの像が置かれ、それを拝まない者は殺される (黙 13:14~15)。
    - しかし、反キリストは最後に滅ぼされる。
- ② 山への逃避 (16~21 節)
- 山とは、ヨルダン川東側の山地
  - ユダヤ人たち (イスラエルの民) は大急ぎで逃げる。持ち物に固執して時間を無駄にしてはならない。
  - 雨季にあたる冬や、移動手段が止まる安息日に逃げるのは困難。

- 後にも先にもこのような苦難はこれまでにない。
- ③ 限定された日数 (22 節)
- 苦難の時間がいつまでも続くのではない。神が限定しておられる。
  - その期間は、ダニ 9 : 27 によれば、半週 (3 年半) = 1260 日
  - ダニ 12 : 11~12 によれば、メシア王国が設立されるまでは、1335 日。  
よって、大患難期が終わって 75 日が、移行準備期間。
- ④ 偽キリストと偽預言者の出現 (23~26 節)
- キリストが密かに再臨されたという噂を信じてはならない。
  - 偽キリストや偽預言者たちに惑わされてはならない。彼らの方法は、大きなしるしや不思議である。よって、しるしや不思議は、必ずしも神からのものとは言えない。
  - イスラエルの民は、避難している山地から飛び出して行ってはならない。
- ⑤ 再臨の状況 (27 節) と再臨の場所 (28 節)
- メシアの再臨は、誰もが認識できる形で起きる。「いなづまが東から出て、西にひらめくように」。突然、しかし誰もが見逃すことのないような形で起きる。
  - 再臨の前に、イスラエルの民が避難している山地に反キリストの軍勢が迫る。
  - 「死体」とは、山地に隠れているイスラエルの民。絶体絶命の状態。
  - 「はげたか」とは、反キリストの軍勢
  - その場所は、ボツラ (現在のヨルダンにあるペトラ)
    - ミカ 2 : 12~13 「おりの中の羊」 → 「ボツラの羊」
    - イザヤ 34 : 5~6
    - イザヤ 63 : 1~2
- (3) 再臨 (マタイ 24 : 29~42)
- ① 再臨のしるし (29~30 節)
- 大患難時代には数回の暗黒がある。ここの暗黒は、大患難時代の末期、メシアの再臨の直前に起こる暗黒である。
  - 太陽、月が光を放たなくなる。「星は天から落ち」は、星も光を放たなくなるという意味であろう。
  - 海が荒れるので、人々は恐怖に襲われる (ルカ 21 : 25~26)
  - 30 節の「人の子のしるし」とは、神の栄光、シャカイナ・グローリーである。
    - 人の子 (ダニ 7 : 13)
  - 暗やみをかき消して、イエス・キリストが地上に再臨する。
  - 地上のすべての国民が、再臨を目撃する。未信者にとっては悲しみの時。
- ② イスラエルの回復 (31 節、マルコ 13 : 27)
- イスラエルは、約束の地に集められる。75 日の移行準備期間中。

- 「地の果てから」＝大患難時代を生き延びたユダヤ人たち。ボツラに避難した民だけでなく、大患難時代の間に迫害のために世界各地に散らされている。
- 「天の果てから」＝旧約時代の聖徒たち
- 生きているユダヤ人と復活したユダヤ人が、ともにメシアの王国に住む。

(4) いちじくの木のとえ (32～35 節)

- ① いちじくの木は、この文脈ではイスラエルのことではない。ルカ 21 : 29 では「いちじくの木や、すべての木を見なさい」とある。葉が出てくると、夏が近いのがわかる。
- ② それと同様に、「これらのことのすべてを見たら」、マタイ 24 : 4～28 の内容＝7 年間の大患難期、とくに「荒らす憎むべき者」がエルサレムの神殿に立つのをみたら再臨までは 3 年半である。
- ③ この世代 (不信仰のイスラエル) が死んで、レムナントだけが残る (34 節)

6. 信者と不信者の区別に関する教え

(1) 携挙 (36～42 節)

- ① 「ただし」は、ギリシヤ語で「ペリ・デ」、話題を変えるとき言葉。
- ② ここから別のテーマに移る。携挙について。
- ③ 携挙が大患難期の後に起こることではない。イエスは、出来事を時間順に教えているのではない。
- ④ この教えの重要ポイントは、携挙の時は誰も知らないが、再臨の時は分かるということ。いちじくの木のとえとの関連で語られている。
- ⑤ 37 節の「人の子が来る」というのは、携挙においてイエスが空中まで信者を迎えに来ることを指す。
- ⑥ 携挙は、人々が何の疑いもなく日常生活を送っている時にやって来る。再臨が大患難期の最後にやって来るのとは大きく異なる。
- ⑦ 携挙の特徴は、信者と不信者との分離。信者は天に上げられ、不信者は地上に残される。地上に残された者は、大患難期を経験する。
- ⑧ 「目を覚ましていなさい」(42 節)とは、教会時代の信者に対する勧めである。
- ⑨ 大患難期を逃れる道 (ルカ 21 : 35～36)
  - 「その日」＝大患難期
  - 地上のすべての人はそれを経験する。人類の不信仰に対する裁き
  - 救いを得た者は、携挙されて人の子の前に立つことができるので、大患難期を経験しない。
  - 救いは、神の恵みにより、信仰を通して受ける。信仰の内容は「福音の三要素」である。

## (2) 再臨のとき、大患難期を生き延びた異邦人に対して

## ① 5つのたとえ話

- 主人の帰りを待つ門番 (マルコ 13 : 33～37)
- 泥棒に備える家の主人 (マタイ 24 : 43～44)
- 忠実なしもべと悪いしもべ (マタイ 24 : 45～51)
- 花婿を出迎える 10 人の娘たち (マタイ 25 : 1～13)
  - 花婿はイエス・キリスト、花嫁は携挙された教会
  - 花婿が花嫁を伴って帰って来るのは、再臨のとき
  - 油 (救われて聖霊を受けている) を用意している娘たちは、携挙以降に救われた人たち
  - 彼らは、メシアの再臨の後に催される祝宴に招かれる。
- タラント (マタイ 25 : 14～30)

## ② 異邦人の裁き (マタイ 25 : 31～46、ヨエル 3 : 1～3)

- ヨエル 3 : 1～3
  - 再臨の後、異邦人が裁かれることについての預言
  - 裁きが行われる場所は、ヨシャパテの谷
  - 裁きの基準は、ユダヤ人をどのように扱ったか
- 再臨したメシアの前に、すべての国々の民が集められる。彼らは、大患難期を生き延びた異邦人たち。
- 羊と山羊のより分けが行われる。羊は、ユダヤ人たちに愛を示した人々。イエスは、ユダヤ人のことを「わたしの兄弟たち」と言っている。
- 羊の異邦人たちには、その認識はない。ユダヤ人にしたことは、イエスにしたことなのである。
- 山羊は、反ユダヤの異邦人。彼らは、反キリストに従い、大患難期においてユダヤ人を苦しめた。彼らは、メシアの王国に入ることは許されず、死ぬ。最終的には、他の不信仰の人々と同様、「大きな白い御座の裁き」(黙 20 : 11) を受けて、「悪魔とその使いたちのために用意された永遠の火」へ。
- 大患難期においてユダヤ人たちに愛を示すことができるのは、信仰によって救われた人であることの証明である。



## 結論

1. 終末論の流れ
  - (1) エルサレム神殿の崩壊
  - (2) この世の終わりの前兆 (世界戦争・飢饉・地震)
  - (3) 携挙
  - (4) 大患難期
    - ① 前半の3年半
    - ② 後半の3年半
    - ③ 大患難期の末に、再臨
      - 直前に暗黒
      - シャカイナ・グローリー (神の栄光) とともにメシアが来る
  - (5) イスラエルは約束の地に回復される
  - (6) 次の世=メシアの王国 (黙示録ではじめて、「千年」と啓示される)
2. オリーブ山の説教は、あらゆる時代の人たちに対する適用を持っている。
  - (1) エルサレム神殿崩壊の前
    - ① 使徒たちへの迫害
    - ② エルサレムが軍隊に包囲されるのを見たときの対処
  - (2) エルサレム神殿崩壊の後
    - ① 偽キリストの出現
    - ② 地域戦争が頻発するが、まだ大患難期は来ない
    - ③ しかし、携挙はいつ起こるかわからない。目をさましていなさい。
  - (3) この世の終わりの前兆が起きる時代
    - ① 世界大戦が起きたら、大きな地震が頻発したら、激しい飢饉が来たら
    - ② 大患難期が近い。
  - (4) 大患難期
    - ① 前半と後半で何が起こるのか
      - 反キリストとイスラエルとの7年間の条約締結が、大患難期の始まり。
      - 反キリストは、3年半で条約を破棄して、エルサレムを占領。
      - 後半は、反キリストが全世界を支配。
    - ② 特に後半では、信仰あるイスラエル民族は山へ逃げよ。
    - ③ 再臨はどのようにして起こるのか
    - ④ 異邦人は大患難期をどのように過ごすべきか
  - (5) 大患難期の異邦人に対して語られている5つのたとえ話について、現代の私たちにも適用すべき教えが含まれている。それは、目をさまし、勤勉に主のしもべとして労することである。
    - ① 目を覚ましていること (携挙や再臨を待ち望む)
    - ② 注意深く生きること (正しい歴史観と人生観を持つ)
    - ③ 勤勉に主の業に励むこと (一人ひとりが与えられた賜物を用いて仕え合う)

オリーブ山での説教

縦に説教の順序	章	節		対象	横に内容を時系列の順序で		使徒たちへの迫害	エルサレム崩壊	偽キリスト出現	地域戦争	世界戦争	飢饉地震	携挙	この世の終わり=大患難時代				75日の準備期間		
		1	2		前半年(3年半)	後半期(3年半)								異邦人の裁き	帰還					
						開始										後半期	再臨			
1		1	2		神殿崩壊の預言															
2	マタ24	3			弟子たちの質問			【Q-1】												
3		4	6		【A-3】				○											
4		7	8																	
5	ルカ21	12	19	イスラエル	【A-1】															
6		20	24																	
7		9	14		【A-2】															
8		15																		
9		16	21																	
10		22																		
11	マタ24	23	26																	
12		27	28																	
13		29	30																	
14		31																		
15		32	35																	
16		36	42	教会		携挙														
17	ルカ21	34	36																	
18	マル13	33	37	異邦人	信者と不信者の区別															
19	マタ24	43	44																	
20		45	51																	
21		1	13																	
22	マタ25	14	30																	
23		31																		
		32	46																	